

# 連隊簿からみた近世プロイセン軍隊社会（上）

——一七九二年の歩兵第三連隊の事例——

鈴木直志

はじめに

- 一 近世プロイセン軍における連隊
    - (一) 連隊の編制と多様性
    - (二) 歩兵第三連隊
  - 二 歩兵第三連隊という軍隊社会
    - (一) 兵士
    - (二) 下士官
    - (三) 将校、その他（軍楽隊員・部隊属僚・補充隊）
- おわりに

軍隊とこれに直接・間接に関わる一群の人々（戦闘員である将兵だけでなく、その家族や、商人をはじめとする従軍集団なども含む）を意味する軍隊社会は、広義の軍事史において中核的な位置を占める研究領域である。それゆえこのテーマに関しては、わが国の近世ヨーロッパ軍事史研究においてもすでにある程度研究が蓄積されてきた。兵士の社会的出自や勤務年数<sup>(1)</sup>、彼らの日常生活<sup>(2)</sup>、家族<sup>(3)</sup>、あるいは彼らと地域社会との関係<sup>(4)</sup>などに関する成果がそれである。これらを通じて軍隊社会に関する認識は大いに深められた。例えば、兵士の主たる供給母体が底辺に近い下層民であったことや、多くの兵士の勤務期間がそれほど長くなく、軍隊生活はいわば季節労働的な性格を帯びていたこと、さらにヨーロッパに広く残る「常備軍兵士は社会の屑」というイメージは一面的で、兵士の多くは地域住民とも比較的良好的な関係にある「普通の人々」の側面をも有していたことなどが明らかにされたのである。

とはいえ、それでもなお、近世ヨーロッパ軍隊社会についての研究不足はいまだに否めない。そもそもわが国では研究量が絶対的に不足しているし<sup>(5)</sup>、加えて既存の研究においてもデータは断片的であることが多く、ある期間なりある部隊なりを網羅的に調査した研究は、今なおほとんど存在しないからである。本稿はこのような認識の下、一八世紀末プロイセンのある一つの歩兵連隊に着目して、近世軍隊社会研究にささやかな寄与を試みようとするものである。周知のように、連隊は軍隊社会のもっとも重要な基本単位であるが、これまでの研究ではせいぜいのところ、その数的な変動が論じられた程度であった<sup>(6)</sup>。そのため連隊については、例えばその人員構成であるとか、この組織が軍隊社会として有した特質といった基本的な問題ですら、われわれの知識はいまだにごく表面的なところにとどまっている。こうした状況は、ある一つの連隊に深く沈潜することで少しは改善できるかもしれない、またそれにより、これまで漠然としか分からなかったことや、連隊や中隊の戦闘組織としての特質をも<sup>(7)</sup>、もう少し掘り下げて考えることができるかもしれない。これらが本稿を導く問題意識である。ここでは、ハレ市（一六八〇年以降プロイセン領）に駐屯したプロイセン旧歩兵第三連隊が一七九二年五月に作成した連隊簿をもとに、考察を試みたい。ハレの市

立文書館が所蔵するこの史料は、欠落や焼失部分などのない完全な状態で残っている<sup>(8)</sup>。それゆえこの史料の検討を通じて、連隊データの網羅的な収集や分析が可能なのである。

一八世紀のプロイセン軍では、多種類の名簿が作成された。入隊および除隊者名簿、身長表 (Mabextrakt)、将校の位階表 (Rangliste) と彼らの勤務評定表、宿営簿、徴兵区名簿などである<sup>(9)</sup>。最初の二つのリストについては、連隊長が毎月国王へ送付することになっていた。また中隊長は自分の中隊の兵員録 (Rangierrolle) を、連隊長は全中隊のそれを保持することが義務づけられていた。しかしこれ以外にも、連隊を維持管理する連隊長が、必要に応じてこれらのリスト (およびその諸項目) を随意に組み合わせて自分用の名簿を作った。これが連隊簿 (Regimentsbuch; Truppenstammrolle) と呼ばれるものである。本稿で検討する第三連隊の名簿はまさにこの連隊簿である。ここには、はじめに歴代連隊長および中隊長のリスト、将校の位階表、下級将校の配属表、補充隊 (Depot) の将校リスト、といった将校関連のいくつかの表があり、これに続いて、下士官・兵士の兵員録が中隊別に記載されている<sup>(10)</sup>。末尾には、身長表、諸項目一覧表が付いている<sup>(11)</sup>。

以下では、まず近世プロイセン軍における連隊について、そして歩兵第三連隊について概略を述べる。その上で、一七九二年の連隊簿を兵士、下士官、将校その他の順で分析し、第三連隊という軍隊社会の諸相をできる限りきめ細かく検討する。その際、同種の項目ですでに他のプロイセン歩兵連隊のデータが存在する場合には、これを積極的に利用して比較を試みてみたい<sup>(12)</sup>。第三連隊の特色は、比較を通じてよりはっきりと浮かび上がるようになる<sup>(13)</sup>。

## 一 近世プロイセン軍における連隊

一七世紀後半に大選帝侯が常備軍を建設して以降、一八〇六年に崩壊するまでの近世プロイセンでは、一八世紀後半の大幅な領土拡張もあり、急激な右肩上がりで兵力が増強された。連隊数もまた大幅な増加を遂げた。歩兵連隊だけについて見るなら<sup>(14)</sup>、軍人王フリードリヒ・ヴィルヘルム一世が統治を開始した一七一三年のプロイセン軍は、

わずか二〇個（総兵力三万八〇〇〇人）に過ぎなかった。しかし彼が没した一七四〇年には、三一個連隊（総兵力八万一〇〇〇人）にまで増加している。これを引き継いだ息子のフリードリヒ二世は、即位直後のオーストリア継承戦争によってシュレージエンを奪取し、これを通じてさらに兵力を増強した。七年戦争が始まる一七五六年の連隊数は四七個（総兵力一五万人）、王が没した一七八六年には五五個連隊（総兵力一九万五〇〇〇人）に及んだ。その後、ポーランド分割に伴う領土拡大によりさらに増強されたプロイセン軍は、一八〇六年時点で六〇個の歩兵連隊（総兵力二三万一〇〇〇人）を擁するまでに至った。百年も経たないうちに、実に四〇個もの歩兵連隊が増設されたのである。

(一) 連隊の編制と多様性

フリードリヒ大王の即位後まもない一七四三年に制定された歩兵隊規定 (Reglement) によれば<sup>(15)</sup>、連隊は二個大隊編制で、擲弾兵中隊二個、マスケット兵中隊一〇個で構成された。大隊の構成は、擲弾兵中隊一個とマスケット兵中隊五個ということになる。マスケット兵は一般の歩兵 (銃兵) で、擲弾兵 (Grenadier) はこの時期においては選りすぐりの精鋭兵のことを指す<sup>(16)</sup>。連隊の戦闘員は、

将校 (Oberoffizier) 五〇人  
 下士官 (Unteroffizier) 一一八人  
 鼓手 (Tambour) 二七人  
 擲弾兵 (Grenadier) 二五二人  
 マスケット兵 (Musketer) 一一四〇人

の一五九七人で、これに部隊属僚 (Unterstab) 三二人を加えて<sup>(16)</sup>、合計一六二九人で構成された。一大隊は八〇〇

人あまりで、擲弾兵中隊は一四五人、マスケット兵中隊は一三〇人ほどであった。これに加えて、連隊には一〇〇名の補充兵（Überkomplet）の配備が義務づけられていた<sup>17</sup>。プロイセン軍では、フリードリヒ大王が没した翌年の一七八七年に大規模な再編成が行われ、連隊の編制も改められるのだが、これについては後述しよう。

連隊についてはもう一つ、その多様性について言及しておかねばならない。常備軍時代になると兵士に軍服や武器が一律に支給され、軍隊における画一化はもはや前提となってしまうが、その中でも連隊間には明瞭な差異が存在したのである。例えば連隊旗については、旗の中央にプロイセンの鷲を置き、それを丸く囲んだ上に王冠を配するデザインはすべての連隊で共通だが、それ以外の部分、例えば旗の基本色は第一連隊が白、第三連隊は黄、第四連隊は赤といった具合にかなり違っていた。また軍服も、紺青の上着と白いズボンが歩兵連隊全体でほぼ共通だが、下襟や袖のデザインと色、帽子飾りなどは連隊ごとに異なり、非常にバラエティに富んでいた<sup>18</sup>。行進曲もそれぞれの連隊が独自の曲を持っていた<sup>19</sup>。連隊のこのような「個性」が可視化されることにより、さらには各連隊で共有される戦闘の記憶と経験により、構成員である兵士たちは所属連隊への共属意識や団結心を育んだにちがいない。この点は、近年ドイツで注目されつつある「連隊文化」という興味深いテーマに直結するが<sup>20</sup>、ここではただ、連隊という軍隊社会が画一化の中でも個性を有したことで、そしてそれが兵士のメンタリテイの枠組みとして機能していた可能性の高いことを指摘するにとどめよう。

## (二) 歩兵第三連隊

本稿の考察対象である歩兵第三連隊は、一六六五年にファルゲル大佐（Johann von Fargell）が帝国都市のフランクフルト、レーゲンスブルク、ニュルンベルクで募った部隊に由来する<sup>21</sup>。一六七九年に彼が没した後、連隊長を引き継いだのは、アンハルト・デッサウ侯ヨーハン・ゲオルク二世（Johann Georg II. Fürst von Anhalt-Dessau）であった。ブランデンブルクの西南に位置し、マクデブルク公国（一六八〇年からプロイセン領。ハレ市はその一部）を

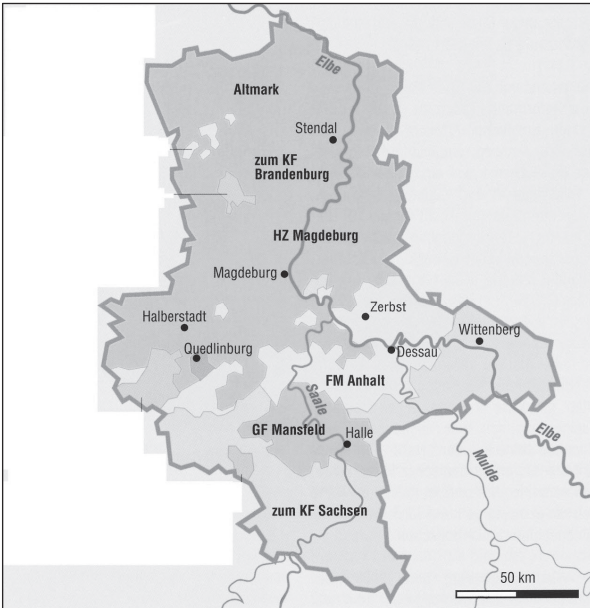
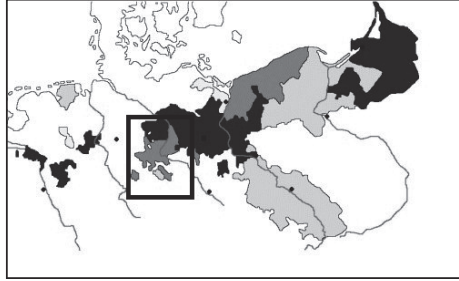
南北に分断するように存在したアンハルト侯国は、小国とはいえ、れっきとした帝国諸侯領である（地図参照）。第三連隊の連隊長はこれ以後一七八四年まで、ごくわずかな一時期（一七五八〜五九年）を除いて、百年以上にわたり、プロイセンに隣接する小国の君主一門によって占められることになった。

第三連隊を率いたアンハルト侯の中で、もっとも有名かつ重要なのは、やはりデッサウ侯レオポルト一世（Leopold I. Fürst von Anhalt-Dessau）であろう。一六九三年に一七歳で連隊長となった彼は、一七四七年に没するまで、半世紀以上にわたりその座にあった。スペイン継承戦争でプロイセン軍の総指揮を務めた彼は、オイゲン公の下で幾つもの華々しい勝利をあげた。また彼は、国王フリードリヒ・ヴィルヘルム一世ときわめて昵懇な間柄にあり、国王が推進するプロイセン軍の改革の、もっともよき協力者にして実践者でもあった<sup>22)</sup>。彼の発案した等歩行進と鉄製の装填棒はまず第三連隊で試され、後に全軍に導入された。レオポルト一世期以降の第三連隊は、他の連隊より一個大隊多く持つことを許されるなど、一七八七年までプロイセン歩兵連隊の中でも特権的な連隊であり、国王が連隊長を務める第六連隊とならぶ看板連隊だったのである<sup>23)</sup>。またこの老デッサウ侯時代の一七一七年以降、第三連隊は大学都市ハレに駐屯し、ここを根拠地とした。

フリードリヒ大王の治世以後もまた、第三連隊はオーストリア継承戦争、七年戦争、バイエルン継承戦争、フランス革命・ナポレオン戦争と、プロイセンが行ったすべての戦争を戦っている。連隊簿が作成された一七九二年五月は、革命フランスに対する動員令が発せられた時にあたる<sup>24)</sup>。第三連隊にも遠征が命じられたので、連隊簿はこの動員令に応じて用意されたのかもしれない。一七八三年以来この連隊に所属していたF・C・ラウクハルトによると、第三連隊がハレを出発して対仏遠征を開始するのは六月一四日のことであった<sup>25)</sup>。そして、その三ヶ月後の九月二〇日、第三連隊はあのヴァルミーの戦いを戦っている。一七九五年のバーゼル条約によってプロイセンはフランスと単独講和し、その後十年ほど平和を享受するが、ナポレオンの台頭により再びフランスとの戦いを余儀なくされる。一八〇六年、第三連隊はアウエルシュテットの戦いに従軍した。プロイセン軍がこれに惨敗した後、同連隊はマクデブルクでグナイゼナウの指揮する軍に合流してなお抗戦したが、その降伏とともに解体された。一八世紀の栄光のプ

地図 18世紀後半のブランデンブルク＝プロイセンとマクデブルク公国・ハレ

\*もっとも濃い色の部分が1640年までのブランデンブルク＝プロイセン領、その次に濃い部分は1688年まで、もっとも薄い部分は1786年までに加わったプロイセン領を示す。地図中の四角の範囲が下図に対応する。



\* KF=選帝侯国、FM=侯国、GF=伯爵領、太線は現在のザクセン＝アンハルト州の州境

出典：M. Scheuch, Historischer Atlas Deutschland, Wien 1997, S.205.

ロイセン軍を象徴する第三連隊は、ここに一四〇年に及ぶ歴史に終止符を打ったのであった。

## 二 歩兵第三連隊という軍隊社会

プロイセンでは、一七八七年の王令により歩兵連隊の編制が大きく変更された<sup>26</sup>。一七九二年五月の連隊簿はこの再編成後に記録されたもので、したがってここでの歩兵第三連隊の編制は、前述の一七四三年のそれとはかなり異なっている。連隊は新たに、擲弾兵大隊一個とマスケット兵大隊二個の計三個大隊によって構成されることになった。大隊は四個中隊から成る。第一マスケット兵大隊は第一、第四中隊、第二マスケット兵大隊は第五、第八中隊、擲弾兵大隊は第九、第一二中隊から構成された（以下では適宜、第一マスケット兵大隊を M1、第二を M2、擲弾兵大隊を G と表記し、中隊番号については丸数字①～⑫で表記する）<sup>27</sup>。連隊長はタデン少将（Johann Leopold von Thadden）で、副連隊長（Kommandeur）はフント大佐（Johann Christian von Hundt）である。前者は①、後者は④の中隊長であり、前者はさらに M1 大隊長も兼務した。M2 大隊長は⑤中隊長のヴェデル少佐（Conrad Heinrich von Wedell）、G 大隊長は⑨中隊長のボックム少佐（Carl Ferdinand von Bockum）であった。

歩兵第三連隊の基本数値を示しておこう。軍隊の管理・行政上の最小単位は中隊であるが、一七九二年の第三連隊の場合、中隊は基本的に

下士官一二人

兵士一五〇人

その他七人（鼓手三人、砲兵四人）

の一六九人で構成された<sup>28</sup>。大隊の人数は M1 が六八五人、M2 と G が六七九人で、これらの総計二〇四三人が、



連隊簿末の一覽表での兵員総数の基本値になっている。もとより第三連隊の総人数は、これに将校六五人、部隊属僚七人、補充隊四六九人を加えた二五八四人であるが、連隊簿で用いられている総数、すなわち軍自身が統計の対象と見なした将兵は、あくまで二〇四三人の兵士と下士官であるため、ここでもまたこの数値を「総数」と見なして適宜利用することにした。ただし、本稿の作業ではよりきめ細かな考察を目指すため、兵士と下士官は別々に扱われる。それゆえ、これらについては連隊簿と異なる母数を設定することとし、「総数」は補助的な利用にとどめる。

(一) 兵士

一七九二年の連隊簿では、第三連隊の兵士は三種類に区分されている。

狙撃兵 (Schütze) : 一中隊一〇人 || 一大隊四〇人 || 連隊二二〇人

補充兵 (Überkomplet) : 一中隊八人 || 一大隊三二人 || 連隊九六人

兵卒 : 一中隊一三二人 || 一大隊五二八人 || 連隊一五八四人

狙撃兵は、一七八七年の連隊の再編成以降、パトロール任務や散開戦のため各中隊に配備されることになった新たな種別の兵士である。経験豊かな兵士がこれに任じられ、いわば下士官候補ともいべき性格を帯びていた<sup>29</sup>。また兵卒は名簿では名前順ではなく、戦列 (Gild) ごとに分類されている。戦列は擲弾兵・マスケット兵のいずれにおいても、すべての中隊で一列四四人の三列編制である。したがって兵卒は一中隊で一三二人、一大隊で五二八人、連隊では一五八四人を数える。特に断りのない場合、ここではこの一五八四人の兵卒に狙撃兵二二〇人、補充兵九六人を加えた一八〇〇人を兵士の母数として用いる。

それでは、連隊簿の記載順に従って、兵士の身長、年齢と勤務年数、出身地、宗派、戦歴、生業、結婚と家族の各

項目について検討してみよう<sup>(30)</sup>。

〔身長〕 プロイセン軍において身長が殊の外重視されるようになったのは、軍人王以降である。前装式燧石銃が普及し始めた当時、リーチの長い長身者の装填は射撃間隔をより短くできた。つまり長身者は新兵器の威力をより多く引き出すことができたため、プロイセンではその需要がとりわけ高まったのである。軍人王の時代には、兵士の最低身長が五フィート (Fuh) 六インチ (Zoll) = 一七二・六センチ (以下では「五フィート」の記述を省略し、インチの部分のみ記す) と定められ<sup>(31)</sup>、もともと高い身長を必要とするマスケット兵第一列の兵士は、九インチ (一八〇・四センチ) 以上の者が求められた<sup>(32)</sup>。身長の基本は息子のフリードリヒ大王にも引き継がれたが、彼は父ほど熱烈に長身者にこだわったわけではなかった。一七五二年の政治遺訓の中で彼が「父の時代からある古い連隊の兵士の身長は六インチ、新設連隊では五インチを下回らなければそれでよい」と記しているように<sup>(33)</sup>、大王以降の時代になると身長の基準は若干緩められ、五インチ (一七〇センチ) になったのである。ハンネが整理した歩兵連隊の身長分布表を見ると、七年戦争までは六インチ基準がおおむね維持されていたこと、また大王期を通じて基準が一インチ低くなったことが窺える (表1)。それ以外にもこの表からは、七年戦争末期に四インチ以下の兵士が多数投入されたこと、すなわちプロイセンにとってこの時期はなりふり構わず兵員を投入した非常時だったことが分かる。戦後に兵士の身長が旧水準に戻るのは、一七七一年頃と見てよいだろう。七年戦争の多大な損失から軍隊が回復するまでには、およそ十年かかったのである。

それでは、一七九二年の歩兵第三連隊の兵士はどうだったのだろうか。この連隊の兵士一八〇〇人の平均身長は一七四・七センチであった。あくまで全体平均だが、「軍人王以来の連隊は六インチ以上」という大王の原則は維持されていたようである。中隊ごとの平均身長では、後述のように①が一七九・三センチとずば抜けて高く、もとも低かったのは⑨の一七二・八センチであった。最長身者は六フィート一インチ (一九〇・八) センチであり、五フィート四インチ (一六七・四センチ) 以下の兵士はいなかった。

連隊簿末には中隊ごとの身長分布の表があるので、それを転載しよう (表2)。この表からはいくつかの興味深い